第２章　小串構内医学部外来診療棟新営に伴う試掘調査

１　調査の経過

宇部市小串に所在する医学部キャンパス（小串構内）では、昭和58年度以降各施設整備に伴い埋蔵文化財有無確認のための数次に及ぶ試掘・立会調査を実施している。その結果、キャンパス中央部、北東部、南東部を除く地域では、調査の進展と呼応して基本層序の理解とともに埋蔵文化財の具体的な埋存状況が把握され、各整備計画に対する円滑な運用に寄与している。

しかるに、昭和60年度に至り、医学部の長期整備計画の一環として外来診療棟新営計画が埋蔵文化財資料館運営委員会に提示された。同委員会は新営予定地における埋蔵文化財の分布状況に対する基礎資料が皆無であることから、埋蔵文化財資料館および関係部局との協議の結果、当該予定地における試掘調査を実施すべきであると結論づけた。これを受けて埋蔵文化財資料館は、昭和60年５月24日から７月10日にかけて当該新営予定地約2600

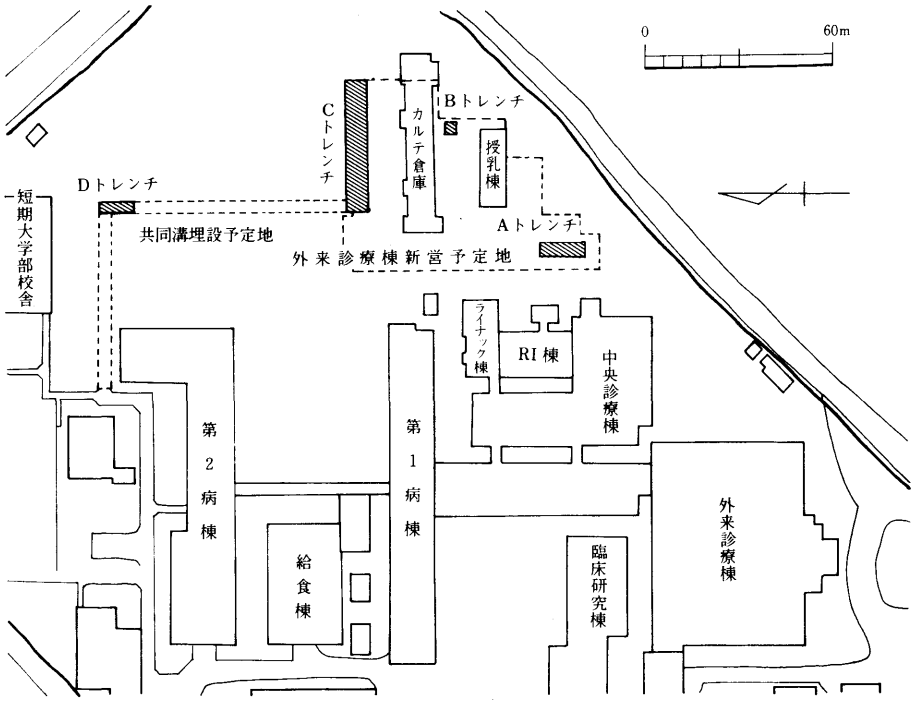


Fig. 1　調査区位置図

m²のうち既設のカルテ倉庫および授乳棟を回避した地域に、3ヶ所のトレンチを設定して調査を実施した。また、同新営建物付随工事において最深の掘削を要する総延長距離176mの共同溝埋設予定地についても、トレンチを設定して新営予定地北方における埋蔵文化財の有無確認の調査を実施した。

なお、当該地域は、現在機能している中央・外来診療棟に近接しており、一般外来者および入院患者等の通行頻雑な地域であることから、各トレンチ単位で調査を完結することとした。また腐蝕土および構内造成時の置土を含む表土は機械を使用して除去し、それ以下は手掘りによる分層発掘を実施した。

その結果、顕著な遺構は検出されなかったが、青黄色ないしは青灰色粘質土から周辺地域からの流入品と考えられる土師質土器、瓦質土器、国産陶磁器など、中世～近代の遺物若干が出土した。

2　層位・遺構

Aトレンチ

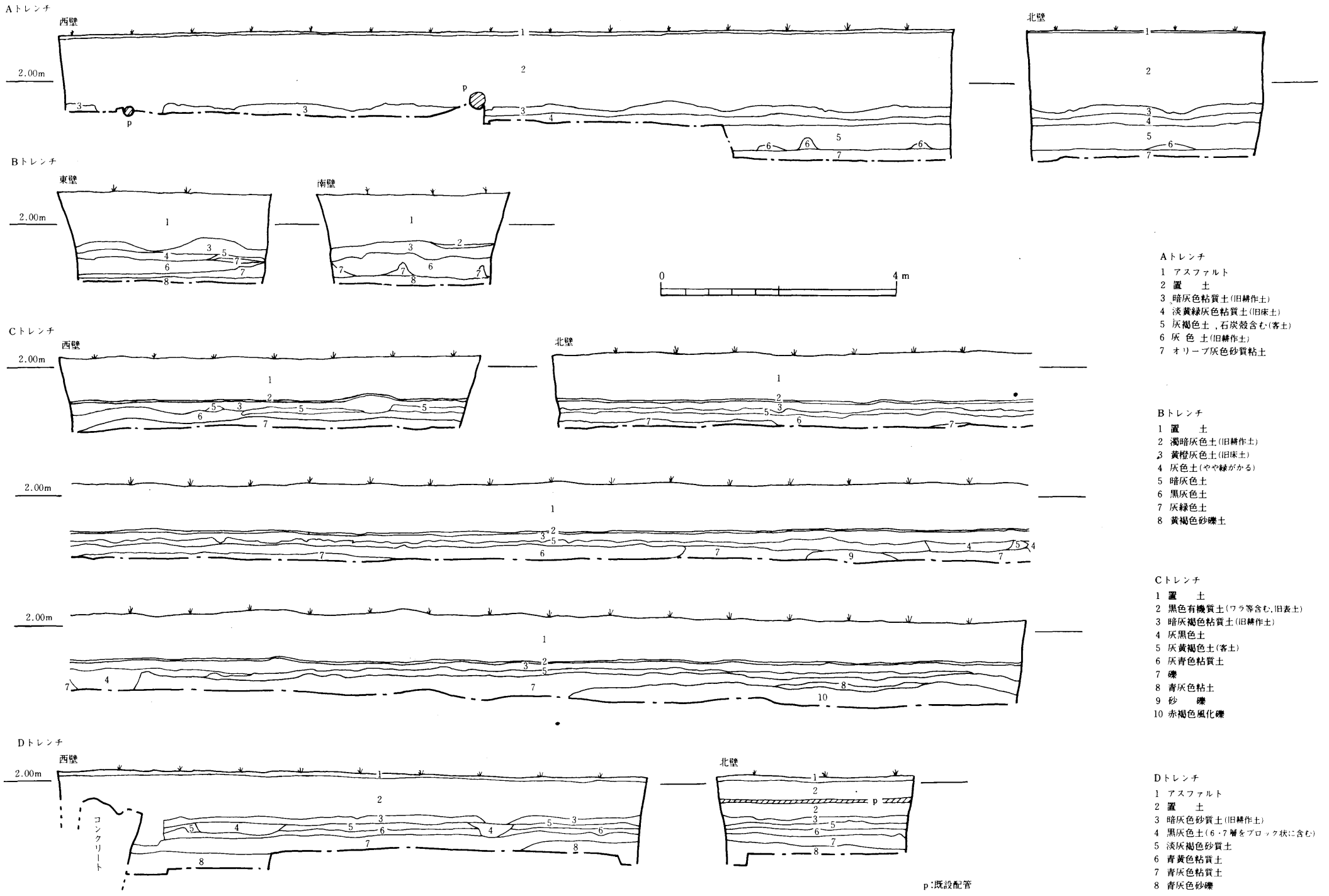
新営予定地最南端の授乳棟と中央診療棟間に南北に設定した4m×16mのトレンチである。現地表面の標高は約2.8～2.9m前後で、地表面下約200cmまで後世の人為的な厚い堆積層が認められる。地表面下約160cmで観察される厚さ20～40cmの石炭殻を含む灰褐色土の客土をはさんで上・下二層の旧耕作土が認められるが、いずれも出土遺物から大学占地前の新しい時期の耕作面と考えられる。なお、下位の旧耕作土直下、標高約0.9mにオリーブ灰色砂質粘土（Hue10Y 6/2）が堆積するが顕著な遺構・遺物は認められなかった。

Bトレンチ

授乳棟とカルテ倉庫間に設定した3.5m×3.5mのトレンチである。現地表面の標高は約2.50m。現地表下約70～80cmまでは腐蝕土および構内造成時等の置土を含む攪乱土で、それ以下、Aトレンチの上位に対応する旧耕作土、旧床土と続く。その下位で、上面標高約1.2mに堆積する灰緑色土を掘り込んだ昭和初期の多量の土器、土製品を含む黒灰色土の充填した溝状の土器溜めが検出された。

Cトレンチ

カルテ倉庫に併行して設定した7m×40mのトレンチである。現地表面標高約2.20m。地表下約80cmで黒色有機質土層の旧表土が観察され、その直下に旧耕作土が残存している。旧耕作土下には整地土（客土）である灰黄褐色土を掘り込んでBトレンチで認められた昭



Aトレンチ
1 アスファルト
2 置　土
3 暗灰色粘質土(旧耕作土)
4 淡黄緑灰色粘質土(旧床土)
5 灰褐色土，石炭殻含む(客土)
6 灰 色 土(旧耕作土)
7 オリーブ灰色砂質粘土

Bトレンチ
1 置　土
2 濁暗灰色土(旧耕作土)
3 黄橙灰色土(旧床土)
4 灰色土(やや緑がかる)
5 暗灰色土
6 黒灰色土
7 灰緑色土
8 黄褐色砂礫土

Cトレンチ
1 置　土
2 黒色有機質土(ワラ等含む,旧表土)
3 暗灰褐色粘質土(旧耕作土)
4 灰黒色土
5 灰黄褐色土(客土)
6 灰青色粘質土
7 礫
8 青灰色粘土
9 砂　礫
10 赤褐色風化礫

Dトレンチ
1 アスファルト
2 置　土
3 暗灰色砂質土(旧耕作土)
4 黒灰色土(6・7層をブロック状に含む)
5 淡灰褐色砂質土
6 青黄色粘質土
7 青灰色粘質土
8 青灰色砂礫

Fig. 2　土　層　断　面　図

遺　　物

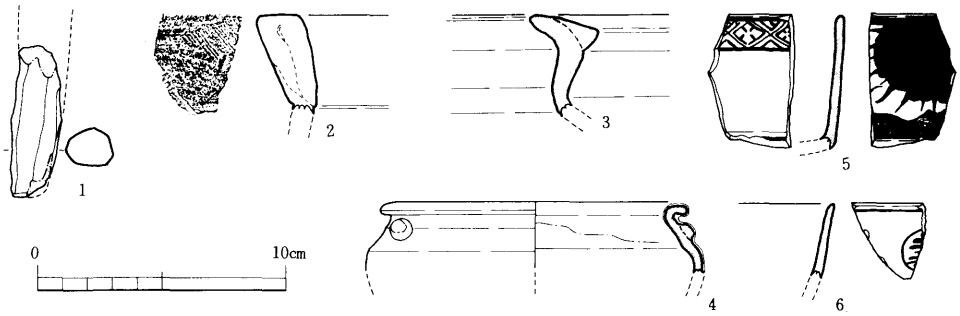


Fig. 3　出土遺物実測図

和初期の遺物を多量に含む少なくとも２本の溝状の土器溜めが検出された。その下位標高約 1.3m 以下が少なくとも非人為的な堆積層で、土師質土器、瓦質土器、国産陶磁器若干を含む厚さ約20cmの灰青色粘質土、砂礫層と続き、東半部では赤褐色風化礫からなる岩盤が検出された。

Ｄトレンチ

共同溝埋設予定地のほぼ中央部の屈曲部分に南北に設定した 3.5m×10m のトレンチである。現地表面標高約2.20m。現地表下約80cmに旧耕作土が残存する。またその下位に堆積する淡灰黄褐色砂質土上面でＣトレンチ同様の土器溜めが検出された。以下、標高約 1.3m に堆積する土師質土器、瓦質土器、国産陶磁器などの遺物若干が出土した青黄色粘質土、青灰色粘質土と続き、北端部では青灰色砂礫層が認められる。

3　遺　物 (Fig. 3, PL. 4(3))

Ｃ・Ｄトレンチから土師質土器、瓦質土器、国産陶磁器が出土した。

土師質土器には鼎、甕がある。１は鼎脚裾部で磨滅、剝落が著しい。２は肥厚する口縁部が内傾する甕で、外面ナデ、内面タテハケののちナデ仕上げ。１、２とも胎土不良、焼成良好。１は淡橙褐色で、二次的な加熱を受け部分的に淡紫橙色を呈する。２は茶灰色を呈する。

３は陶器甕で、ほぼ直立する口縁部をもち、端部が断面三角形状に肥厚してわずかに外上方に立ち上がる。胎土は灰色～黄灰色で、赤茶色の釉を施すが、口縁端部は釉を欠き取り口禿となっている。焼成は良好。

４～６は磁器。４は青磁の小壺。水平に近く短く屈曲する口縁部下に半球状の突起をも

つ。胎土は灰白色で灰色の釉がかりは厚いが、口縁部内面は露胎である。5は染付小鉢。体部下位で屈曲し、そのまま直立して口縁部にいたる。外面草花文、内面上端部に菱形文様を暗青色の呉須で絵描きを行なう。6は染付埦の口縁部。外面に濁青色の呉須による一条の圏線下に丸に網目文をいれる。一部に貫入がみられる。

4　小　結

今回の調査は共同溝を含む新営面積約3600㎡のうち約11％にあたる約390㎡についての4本のトレンチによる試掘調査であった。出土遺物にはC・Dトレンチの青灰色ないしは青黄灰色粘質土からの土師質土器、瓦質土器、国産陶磁器など若干がある。また、中世から近代にかけての各時期のものが混在しており、磨滅、剝落も著しいことから周辺からの流れ込みによるものと考えられる。なお、A・B両トレンチでも同層に対応すると考えられる堆積層が検出されたが遺物は包含していなかった。

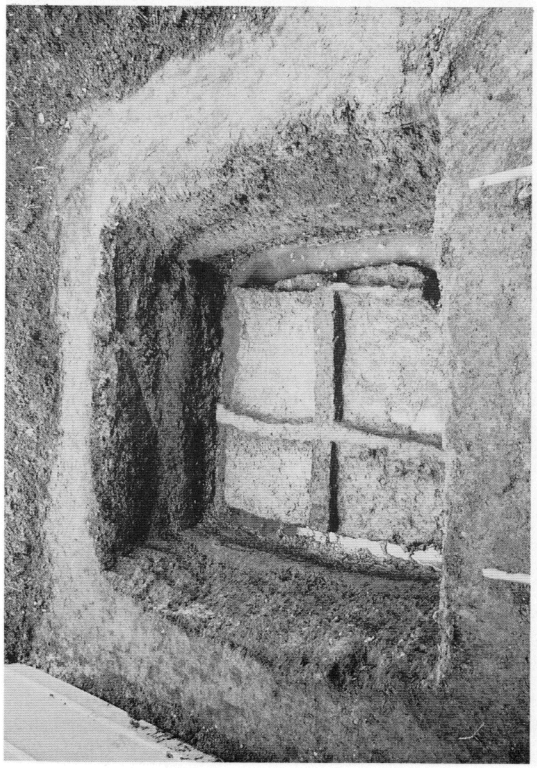
また、Cトレンチでは遺物包含層の下位に、調査区東方に近接する真締川の旧河道ないしは氾濫によってもたらされたと考えられる礫層がトレンチ内ほぼ全域にわたり検出された。このことは、カルテ倉庫東方において現在の真締川がキャンパス内に入り込むように蛇行して南流していることからも推察され、Cトレンチからその北方の駐車場およびキャンパス内を北西－南東に貫く市道南半部付近にかけての地域には、少なくとも中世以前に遡る遺構の埋存する可能性は極めて小さいものと考えられる。

また、昭和58・59年度に体育館新営に伴い実施した調査地域における遺物の埋蔵量と比較すると、包含する堆積層の厚さにはあまり差違は見られないものの、外来診療棟新営予定地における出土量は極めて少なく、かつまた中世に遡ると思われる遺物の出土量も少ない。したがって、外来診療棟新営予定地およびその北方の駐車場の地域は、遺構の埋存する可能性および遺物包含層の遺物の包蔵量いずれとも極めて小さい地域であるものと推察される。

したがって、市道以南の第一・二病棟および給食棟の存在するキャンパス中央部を除いた地域では、今後、過去の調査結果に準拠した諸開発による後世の堆積層の厚さに対応した立会調査等が至当と考えられ、これをもとにさらに詳細な同キャンパス内の埋蔵文化財の分布状況が把握されるものと考えられる。

（河　村）

(1) Aトレンチ全景(東から)



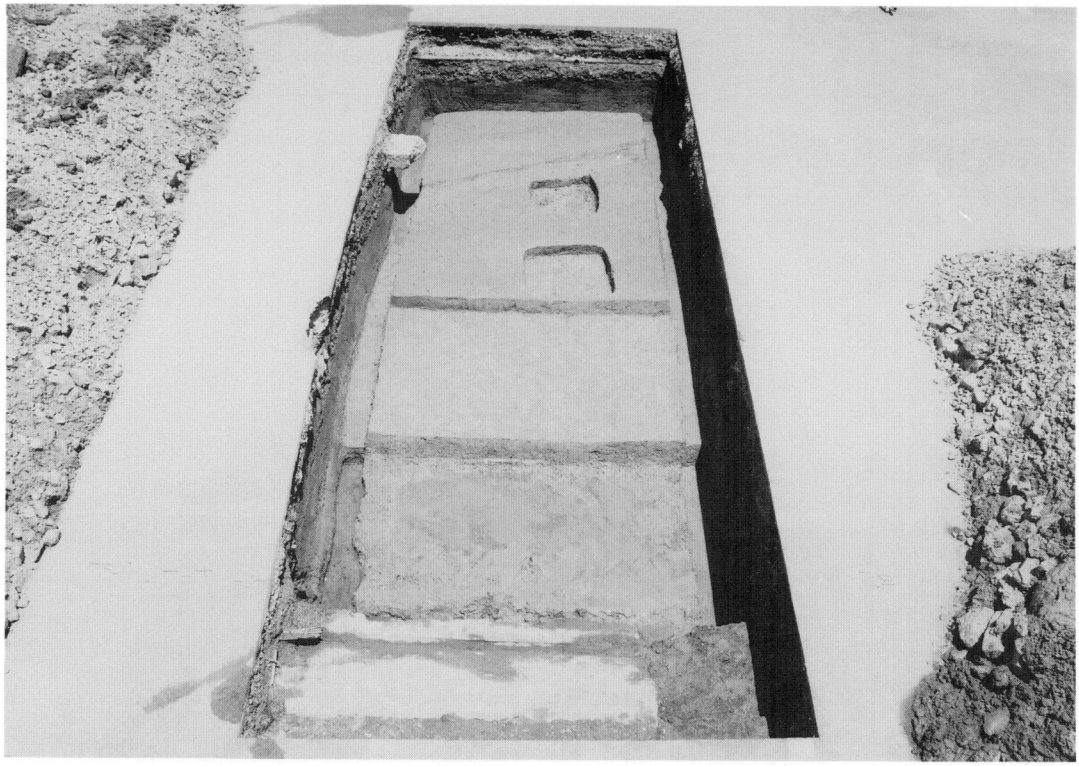
(2) Bトレンチ全景(北から)

(3) Bトレンチ西壁土層断面(東から)

(1)　Cトレンチ全景(東から)

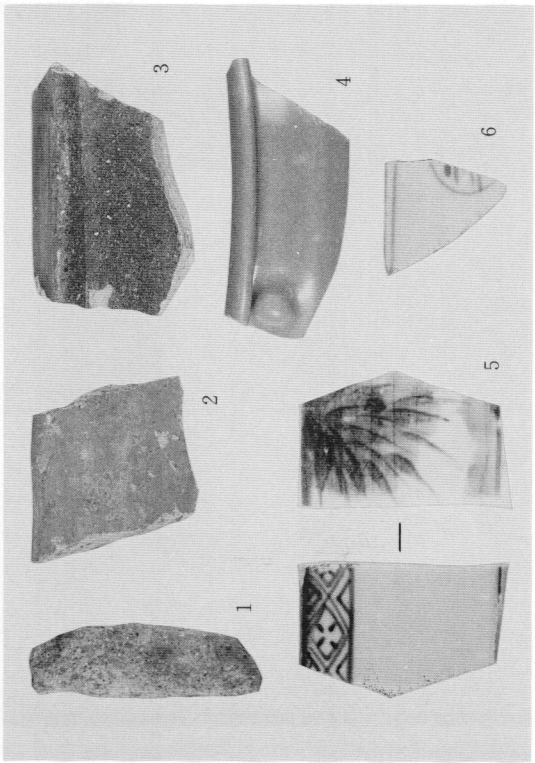
(2)　Cトレンチ土器溜状遺構(北から)

小串構内医学部外来診療棟新営に伴う試掘調査(3)



(1) Dトレンチ全景（南から）

(2) Aトレンチ作業風景(南から)



(3) 出土遺物